

創設期

長谷川 貞夫（辟雍会 会長）

小生が東京学芸大学学芸学部甲類理科に入学したのは、昭和37年4月である。化学を学ぶため入学したが、若気の至りで多方面に興味を示した。

一例をあげると、「大学生は哲学を語り友と酒を酌み交わすもの」と決めつけデカルトの方法序説をひも解いた。ところが、1ページ目から意味不明、ただちに自分は哲学には向いていないと勝手に決めつけ、1週間後には「ギターを片手に恋人と語る」（プレスリーの全盛時代である）ことが現代的大学生ではないかとギターを独習し始めた。無論、1週間経っても曲にならない。そこで、体育会系のレギュラーとして活躍し人気者になるのがスーパーな大学生と考えるのは自然の流れと感じられた。そこで経験者が少ないであろう弓道部に入部した。これが小生の人生に大きな影響を与えるとは考えもしなかったが弓道部に係る話を語ることで今号の「学芸大の未来 地球の未来」という主題に近づいてみたい。

弓道部は、昭和37年5月に同好会が発足し、同年11月に弓道部として学生自治会（当時はいわゆる体育会である学獅会はない）が認めたものである。小生が入部したのは、同好会が発足したのと同時であって、当然部室も道場もない状態であった。



辟雍 第5号 目次

1 『創設期』 長谷川 貞夫（辟雍会 会長）

2 『特集』 学芸大の未来 地球の未来

『地球村の中の学芸大「コミュニティー」』 吉富 友恭

『次世代につなぐ新しい価値』 遠藤 純夫

10 ヘキヨウネット

『新人司書奮闘記』 渋谷 泰子（06年 学習社会文化卒）

『空へ／CO₂』 寺谷 和久（72年 保健体育卒）

『もえたぎる想いを自然体で』 米重 清光（72年 保健体育卒）

『北海道への就職と暮らし』 千賀 愛（03年 発達支援講座博士修了）

『二十数年ぶりに母校を訪ねて』 戸梶 忠行（85年 数学卒）

『地域の自然を見守る』 須永 智（84年 理科教育修士修了）

22 二つの庭の物語「吉田水辺公園」と「飯島和日本庭園」 学長 鷲山 恭彦

6 学生座談会 『わたしの未来』

24 本部・各部報告

辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）機関誌 辟雍
2008年 第5号
平成20年11月1日

発行者 長谷川 貞夫

編集者 真山 茂樹

デザイン 池上 貴之

事務所 東京都小金井市曹井北町4-1-1
東京学芸大学20周年記念飯島同窓会館

郵便番号 184-8501

代表電話 042-331-0020

HP www.u-gakugei.ac.jp/~dousou

Eメール dousou@u-gakugei.ac.jp

印刷 (株) サンプル

体育科の野尻教授に顧問教官をお願いし、柔道の内山先生と剣道の村上教授のご理解で巻藁という至近距離から射て、練習をするためのものを武道場(今の野球場の位置に、木造だが体育館として使用でき剣道の稽古に堪えうる立派なものがあった)の前に設置し稽古を始めた。さらに、三鷹にあった範士九段小山晋一郎先生の個人経営の寂光洞という弓道場を夜間に無料で開放していただき、的前稽古(正規に的に向かう練習)もできた。弓道部にとって恩師である先生方はすでに故人である。

東京学芸大学弓道部は、先に述べた諸先生方のおかげもあり、創部1年目の昭和38年6月に行われた東京地区国公立体育大会弓道の部に初出場することができた。無論経験不足練習不足で、それを補うためにも自前の弓道場を持つ必要性を実感した。

その年の7月には現在の弓道場の場所を開墾して、弓道場としてよいとの許可が学生課から出た。無論、大学がその場所を必要とする場合は立ち退くことが条件であったが、当時その地はニセアカシアの荒れた林であった。この開墾は少ない部員で行うには壮絶なものがあった。その開墾の苦勞から、弓道部の

機関誌は「ニセアカシア」と題している。

小金井キャンパスは、旧陸軍技術研究所の跡地であり、兵舎などに使われていた木造建築物が徐々に取り壊されていた時期と重なった。その関係で、良質の古木材が学内のあちこちに積まれており、その使用許可もいただいていた。3か月にわたる開墾の後、その木材を利用して、「あづち(的を置き矢がささる砂場を覆う建物)」の建設に取り掛かった。設計は当時の弓道部員で美術科に所属していた人で、卒業後他大学の建築学科を出て、現在1級建築士として活躍している。

さて、順調に柱が建ち屋根もできたが、柱と柱の間に張る板がない。部員達で出し合った資金もすでに尽きている。そんなある日、建築現場の近くに真新しい杉板が高く積まれていた。どうしたのだろうか、学生課と連絡をとった。当時の学生課長が、「いらない板を置いてあるのだよ」と言われた。さらに「あづち」に必要な砂も置いておいてくださった。粋な計らいであり天の助け、これで「あづち」が完成し部創設から3年目には東京都学生弓道連盟に加入し、5部で初出場初優勝をあげることができた。学生が自ら考え、自ら実行することに、教官並びに事務系職員が心から応援して下さった結果である。



小生が卒業後、古材再利用の射場を大学が建設し、第2道場は学生がOB会の資金援助を受け射場ならびに「あづち」を造り完成したのは創立から10年ほどたった昭和45年であったろうか。東京学芸大学弓道部設立以来47年目の今、大学は来年60周年を迎える、ちょうどそれに併せるがごとく弓道場が新設される予定である。この弓道場は、大学が地域との連携を図る一環として、ある近隣の市に一部貸し出す予定と聞いているが、このように時代の流れは確実にこのような場面にも適用されることを実感するところである。

縷々、思い出すまま弓道部の創設期の施設について書き述べたが、結局のところ部員の誠意ある行動と共に関係各位との出会い、いいかえれば「人と人との出会い」であり、発展は自然の流れの中にあることを再認識する機会となった。

まだまだ創設期にある辟雍会も、独自の施設を持つには至っていないが、大学のご厚意により立派な事務室を中心に活動を展開することができている。辟雍会が多くの「人と人との出会い」があって今後益々発展するのだと考えるのは自然であろう。



左から弓道場／生協がでける前／旧図書館／剣道場

学芸大の未来 地球の未来

地球村の中の学芸大 「コミュニティ」

吉富友恭

これまでの「国際化 (Internationalization)」を超えて、現代は地域が世界に直接つながる「全球化 (Globalization)」の時代と言われています。この中において、私たちの地域社会への参画は益々盛んになってきました。地



域社会の活動に参画すると、いま教員や学生に求められていることが何かが実感できます。地域への参画は、環境に対して自分たちが出来ることを見出す機会ともいえます。近年、コミュニティとしての学芸大は、地域社会のコミュニティと交わって相互に活性化し合いながら発展しています。本稿では、私が学生と一緒に経験した「水辺の魅力伝える」取り組みの中から2つの事例を紹介したいと思います。

佐賀県松浦川流域、唐津湾の河口から約16kmの辺りに「アザメの瀬」と呼ばれる大きな湿地があります。ここは自然再生事業地で、かつて水田として利用されていた土地を掘り下げて、湿地の機能再生を図る計画のもとに造成された場

所です。面積約6haのエリア内には、クリークや池、湿地、棚田等、いくつかの空間が整備され、そこに多種多様な生物が生息しています。アザメの瀬は松浦川の出水によって冠水することで、その様相が一変します。出水をきっかけに、土砂や種子が運び込まれ、魚などの生物も行き来するため、出水後は現地で多くの事物や事象の変化が観察できます。

私は3年前から学生と一緒に足を運び、この場所で氾濫原的湿地における自然解説の考え方や方法についての検討を続けています。前述のような変動的なフィールドで、知識レベルや興味・関心の異なる様々な対象者に対応できる解説方法を見つけることが課題です。そして検討の結果、サインとワークシートを導入したモジュール型の学習プログラムづくりを提案しました。サインは地面に差し込めるポールで、先端にビクトグラムが付いています。サインは日々変化する現場の観察ポイントを示します。ワークシートは「魚の種類」「年間の水位変動」など、一つ一つのまとまった話題がイラストや写真を多用してまとめられた持ち歩きながら使うシートです。これらをモジュールと考え、状況に合わせて必要なシートを組み合わせることで、様々なパターンの学習プログラムをセットできるようにしました。

この解説モデルの提案に至るまでに

は、多くの人々の参加と協力がありました。事業を担当する武雄河川事務所の職員の方々はもちろん、NPOアザメの会を中心とした地域住民の方々、唐津市立相知小学校の児童の皆さんにも調査に協力して頂きました。そして、本学からも私の研究室に所属する環境教育専攻の学部生が参加し、創造的・芸術的センスが必要とされるデザインについては、美術科の先生と院生、学部生も積極的に参加してくれました。大学側が用意したプレゼンテーションや試作品をもとに、何度も議論して改善を重ね、ようやく一つの形が見えてきました。アザメの瀬の自然や歴史、人々の関わりの特徴を背景としながら、多くの人々の積極的な参加によって、独自の自然解説の方法が出来上がりました。



2年前、韓国ソウルに河川の再生と河川関連の展示施設の調査に行く機会がありました。世界には数多くの河川に関する博物館や資料館が存在しますが、河川の展示方法や施設のあり方に

ついでの研究はまだ始まったばかりです。調査の目的は、韓国の河川の現状を把握し、それが展示や教材を通してどのように社会に発信されているのか、その考え方や手法の特徴を明らかにすることでした。この調査には研究室に所属する学部生全員が参加し、現地に詳しい韓国からの留学生で教育心理専攻の院生にも参加してもらうことができました。

主な訪問先は清溪川（チョンゲチョン）。清溪川はソウル特別市の中心部を流れ、漢江（ハンガン）に合流する河川です。この河川はかつて暗渠化され、その上には多くの商人が移住し、さらに清溪高架道路が走っていました。その高架道路の老朽化や環境汚染の問題をきっかけに、高架道路を撤去し、河川を蘇らせる大規模な復元事業が行われました。そして2005年、



約40年間道路の下に隠されていた清溪川がその姿を現しました。その事業や

清溪川の自然や歴史、文化を展示する「清溪川文化館」を訪問しました。館内では、職員の方の説明を受けながら、復元過程をビジュアルに理解できる多くの展示を見学しました。展示をよく見ると、復元事業の間には細かく丁寧なそのプロセスの様子が記録されていることがわかり、展示に使われている映像や資料の質の高さが伝わってきました。また、解説員の方に学校関係者向けの教材を紹介してもらい、それらを実際に使ってみながら意見交換をしました。積極的に情報を吸収しようとする学生の姿勢からか、ストックしてある多くの教材を見て頂くことができました。屋外でも川沿いを歩きながらボランティアの方から自然解説を受け、清溪川の生態的な特徴を聞きながら、河川は画一的なものではなく、それぞれに個性があることを再認識しました。

清溪川文化館の他にもいくつかの施設を訪れて、何人もの関係者から話を聞き、インタビューする中で、我々日本人に対して韓国の河川の知ってもらおうという意欲が強く伝わってきました。帰国した後、訪問した施設のことを多くの人に知ってもらう手段があればと多くの学生が思い、その方法を考えていました。異文化に触れながら、海外にある水辺の魅力を感じることの

できた有意義な訪問でした。



以上のように、地域社会、さらには世界に出かけて、多くの方々との交流や活動を通じて得た学生の学びはとてもし大きかったようです。地域の魅力を現場で共有したことは、大学の中だけでは経験できない学びでした。また、研究室の学生にとっては異なる専攻の学生との交流があり、それぞれの観察力や表現力の違いにも刺激を受けたようです。成果物や現場で培ったノウハウは学生自身の活動に反映されました。アザメの瀬での成果物は美術科の修了制作にとり入れられ、環境教育の卒業研究には調査手法が活かされました。また、韓国訪問については、調査記録をもとに学生が紹介文を執筆し、それらは新しい河川の博物館や資料館を一冊にまとめた「水辺のミュージア

ム」という冊子に掲載されました。これらの成果は大学で評価を受け、再びそれぞれが地域へと還元されました。社会での経験は、大学を卒業した後にも、またどこかでフィードバックされることでしょう。

持続可能な社会づくりに向かって、学芸大というコミュニティは大学の枠組みを越えて動き始めています。地域社会と学芸大のコミュニティとが重なり合って有効に機能することで、学芸大自体も活性化されるのです。地域社会に出ると、いま求められている大学の力が何なのか明確になります。地域社会への参画は、自分たちがこれから取り組むべき行動を見出す機会、すなわち、自分たちの未来を描いていく機会となるでしょう。大学が地域社会へ積極的に参加しているような、さらに地域に関わりながら世界につながるような仕組みや教育・研究環境づくりが、21世紀の学芸大には必要であることを実感します。

☆

東京学芸大学環境教育実践施設准教授 水産学博士（東京水産大学）。独立行政法人土木研究所自然共生研究センター研究員を経て現職。専門は魚類生理学、環境展示論。河川の生物と環境の関わりをテーマに研究を行うとともに当該分野の成果を展示や教育メディアに表現し、社会に橋渡ししていくための研究や創造活動を進めている。

学芸大の未来 地球の未来

次世代につなぐ 新しい価値

遠藤純夫

すべての生き物は、次の世代を遺し・育てることに種族の命運をかけ、いろいろな工夫を積み重ね、地球という星の今の時代を築いています。既に、工夫の余地がないほどの生き方を組み込まれているように見える生物もいます。が、ほ乳類は生きるために学習が必要です。特に人類はよりよく生きるための知識や技能などを次世代に累積していくしくみをつくって今日にいたっています。

いま、私たちにはいくつかの課題があります。その中の一つは、地球の環境のことです。人類は、豊かな生活を夢みて知識や技術を累積し、わずかな世代を重ねただけで地球の未来に責任をもたなくてはならない存在になってしまいました。もう一つは、夢を語ら

なくなった子どもたちのことです。戦後の飢えを体験した世代は必死ではたらく日本を豊かな国にしようと頑張ってきました。食は満たされ、どの家庭も電化されて家事からも解放され、車も個別に所有するようになりました。そして、アルビン・トフラーが「第3の波」と予言した「情報化社会」に浸かっています。東洋の奇跡と羨まれるような夢を実現したかにみえました。しかし、国際的な諸調査で「夢をもたない（語らなくなった 日本のごとも）」がクローズアップされています。夢を語れない子どもがいる社会が豊かな社会といえるはずがありません。

祖父母の時代は、家事ではたらきつくめの母の手を少しなりとも休めさせてあげたいという願いがあり、それは洗濯機や冷蔵庫などの「もの」によって実現しました。しかし、現在が、そのようなみんながどうしても欲しいと思う「もの」が見つからない社会になっているのです。「食べる」「ものを手に入れて使う」「いろいろなサービス

を享受する」という欲求の中からは夢とするほどのものは創り出せなくなっています。現状でよいということなのでしょう。このことが、人生の目標として「その日その日を楽しく暮らす」を支持する高校生が他国に比べて取り分け多いことの二因になっていることは間違いないですが、同じような状況下にある米国やフランスなどのこともたちに比べて「将来に希望をもつ」ことでの割合が少ないことは、教育の在り方を考える基本的な問題といえます。

夢をもち、目標をもって進むということは、多少なりとも現在を担保して何かに耐え、努力する必要があります。夢の実現のためならばその汗も楽しみとなるという体験が学校はもとより、こどもの生活の全ての場合に必要です。夢を喪失した社会や夢を語らなくなった子どもに夢を再び創出するための次世代育成プランというべき事業を立ち上げる必要があるのです。

いつの時代も子どもたちは、勉強は二の次で遊びに夢中です。しかし、いやでも勉強をしていたのは立身出世のためであったり、先生や親が怖かったからというのが真相であったと思います。人生の目標が「その日その日を楽しく暮らす」などと気楽なことなどいえるわけもなかったのです。だから、今や先生は、言うことを聞かない子、学習に取り組む体勢がとれない子をし

かる確たる根拠を失ってしまっているように見えます。

「なぜ学ぶことが必要なのか」という問いに胸を張って答えるためには、国や社会に達成すべきまっとうな「夢」が掲げられている必要があります。祖父母の世代から父母の世代までのわずかに二回の累積で「飢え」から開放され、

学校の授業時間以外の1日の勉強時間の勉強時間の割合 (%)

区分	全く、ほとんどしない	30分より少ない	30分以上1時間以内	1時間以上2時間以内	2時間以上3時間以内	3時間以上	無回答
高校3年	41.0	7.6	7.4	9.8	11.0	22.6	0.5
中学3年	8.5	5.6	9.6	23.1	28.4	23.6	1.2
小学6年	10.8	16.7	28.2	27.1	10.5	5.1	1.6

TIMSSにおける主な国の中学校2年生の理科に対する意義
(そう思う、強くそう思う生徒の割合：%)

国・地域	理科が大好き・好き	理科の勉強楽しい	理科は退屈だ	理科はやさしい	理科は生活で大切	科学を使う仕事したい
日本	56	53	33	15	48	20
シンガポール	92	90	15	42	93	61
韓国	59	40	33	20	74	26
イギリス	78	82	24	23	81	47
アメリカ	71	73	39	53	80	50
国際平均値	73	73	31	43	79	47

さしあたって欲しい「もの」もなくなり、「情報」のサービスも過剰といえるほどになりました。次の世代に累積されなくてはならないものは、物質と利便性だけを追求する知識や技能だけでなく、美しいもの、正しいもの、みんなの喜びとなるもの、地球という星の今に生きている仲間のためになるものを追求する知識や技能でなくてはなりません。そうしたまっとうなストーリー

リーがこいもの学びの前提として必要なのです。次の夢や価値の創造は、「美しい地球の未来のため」というキーワードの中から始まるでしょう。既に使ったものはきれいに自然返す知識や技能が日本から世界に発信されています。失いかけている自然を大切に。する古来からの知恵や気持ちも次世代に伝え大きくしていく必要があります。

「学芸大学の未来は地球の未来をになっている」という趣旨のテーマを頂きますが、学芸大学の未来ではなく、いまが、地球の未来につながっています。学生が先生になる前に自然の中で学ぶ機会をもつことを期待しています。

☆

昭和37年東京学芸大学（理科）卒業。東京都内の中学校教諭、教育委員会指導主事、中学校校長を歴任。平成12年定年退職後、全国中学校理科教育研究会会長を経て現在同研究会顧問。独立行政法人宇宙航空研究開発機構の宇宙教育推進室参事、東京学芸大学非常勤講師を歴任後、平成20年よりNPO法人「子ども・宇宙・未来の会」理事。教育委員会、大学、地域の企業などを結び、親子科学教室を全国で展開している。



Copyright JAXA/NHK

学生座談会

わたしの未来



2008年7月29日(火)PM3:00~PM5:00



未来への夢を抱いて入学した学生たちは、今、卒業後の自分をどう予想しているのでしょうか。あるいは、どうありたいと願っているのでしょうか。学部生、院生の皆さんに、これからの5年後、10年後、20年後、30年後の未来図を語ってもらいました。

司会 5年後、10年後、20年後、30年後はどうなっていると思いますか。

中村 卒業して、10年後は結婚していたいですね。できれば早めに子供も欲しい。仕事は、今のところは国語教師になりたいと思っていますんですけど、ほかのことも経験してみたいという気持ちもあるので、正確には悩んでいるという方が正しいかな。その先は・・・できればずっとここに。都心に住むつもりはありませんけど、神奈川、相模原あたりにずっといたいなと思っています。特に10年経ったから、20年経ったから、何かがすごく変わるということは余り想像していません。そんなに変わらない生活を続けているのではないかなと思います。

一柳 もう就職決まって、来年は社会人なんですけど、5年後、その会社でまずはおむしやらに頑張っていたいなと。

司会 どんな仕事ですか。

一柳 アパレルです。10年後は新店立ち上げとか、店長とかやっているとは思ってんですけど、順調に行けば。その会社の中で新しい事業を立ち上げられたらな、なんて思っています。30歳くらいになったら結婚したいと思っています。20年後は地元で自分の洋服屋さんか居酒屋を開きたいと思っています。

司会 というと、地元に戻る?

一柳 はい、そういうことで地元貢献できたらなと。

司会 じゃあ、若いうちにいろいろな経験をして、その経験を生かして地元に戻って店を立ち上げる?

一柳 はい。学芸大学で教育関係の人にお世話になって、教育に対してすごく学べたので、30年後には、政治家になりたいなと。地元の教育に還元ができたかなんて、まあ大きいことも考えてますけど、あくまで理想なんです。5年後は卒業して、多分就職してると思います。教員養成課程に入った

司会

米川

30を迎える前に結婚してたいです。やっぱり子供が成人したときに50を超えていると、何が元氣ない感じがするじゃないですか。やっぱり若いうちに子供がいっぱい欲しい。それなりの経済力もつけていたいんですね、10年後には。20年後は38歳ですね。一般企業に入っていたなら独立して、そうですね、会社経営ですがね。

司会 会社を立てるとしたら地元には?

米川

やっぱり経済的に成長する可能性は都内の方が高いと思うので、都内でやりたいですね。地元貢献するとしたら、もっと年いてからがいいかな。

山下 僕は4年ですけど、一年浪人して、昨年一年間休学したのでこし24になります。

こし埼玉県の小学校の教員採用試験を受けました。一次は運よく大学側から推薦をいただいて免除だったんですが、二次試験が今週、実技試験と面接があるので、きょう初めて鉄棒の練習を大学でした。逆上がりと後方支持回転をして、一発でできたのもうこれは大丈夫だなと思っています。今ピアノが苦手なので毎日弾いている最中です。

5年後は、今年順調に合格できて、地元で教師になればなと思っています。いきなり教師になって自分に何ができるのかというそういう不安がすごくあって、一般企業の就活もしたんですけど、やはり現場でやりたいという思いが強かったので、こし頑張っただけです。10年後までにはとりあえず奨学金のお金を返したいと思うので、地道に教師

をして、とりあえず借金をなくして、自分でやっていけるって自信がついたら、結婚も30過ぎたくらいにはして、年はいっても若い気持ちでいけばいいかなと思って、若づくりをして、カッコいいおやじでありたいなと思います。

20年後は、教師をやめても何かできるんじゃないかと考えてるので、それに関してできることを今から少しずつ知識として入れて、30過ぎからでもいいから、やっぱり自分のやりたいっていう

ことができる人生でありたいなと思っています。

20年後、30年後って、やはり50過ぎてきたらもう一度教育の現場に戻ってくるのもありかなと考えているので、いろいろ可能性を持って生きていきたいなと思います。

石川

大学院博士課程の一年に在学しています。

学部の一学生からずっと学大にいたので、今年で学芸大学七年目。七年間いるとさすがに、大学の雰囲気も変わってくるなというのがあって、僕が入ったときはS棟、N棟にエアコンがなかったので、テストのときも汗だくで、答案用紙が汗でびしょびしょになった。今、その話してもなかなかわかってもらえなくて。

僕はまだ研究活動をしている段階だけど、うまく行けば3年生で博士論文を出して、その後、ここが一年間くらいは留学できたらいいなと考えています。

日本に戻ってきてから職を見つめるのは大変というのは重々承知してらんですけれど、できればずっと研究に携わる仕事をしていきたいなと思っています。

20年後、30年後やっぱり40歳、50歳になると、自分の研究だけじゃなくて、今度は学部生とか院生を育てていく側になると思うので、できれば学大みたいに教育関係の大学にいて、将来教員を目指す学生と一緒に研究を



鷹野荘

宮田

進めていけたらいいなと思っています。将来、自分の教えた学生が各地の先生になっていくと、とってもうれしいなと思っています。

5年後は、先日、東京都の教員採用試験を受けてきましたので、多分教員をやっていると思います。

今は、連日プール指導に入っていて、見事に日焼けしているけど、現場に行ったら本当にこんな感じになるんだろうなって。先に体験している

ところです。5年後は公立小学校で働いていると思うんですが、10年後は、一つは夢というが野望なんですけど、附属に勤めるというのと、川崎市というのは特別支援学級の設置率が93%くらいあって、そういう環境になれて育ってきたので、その学級の先生になる。あとは地方に行ったり、行政側に立ったりっていうのをいろいろ可能性として持ってるんですけど、一番希望しているのは附属で働きたいっていうこと。それは、もし続けられるのであれば20年後までやりたいかな。その間に家庭も築ければいいんだろうな。さすがに5年後ぐらいって、職についてまだ中堅にもなっていないときに家庭を築くということに対してまだ不安があるんで、皆さん言われるように経済的にも、仕事も安定して、充実した家庭を築けるいい時期を見計らって結婚なり、家庭を築いたりしたいなと思っています。

30年後は研究職になっているが、人の少ない過疎の地域とかで教壇に立ったりできたら、それもそれでおもしろいかなと思っています。

高橋 教育実習の前なので、まだ教師になれるような器

のかどうが全然わからないので迷っているんですけど、教員になるって決めたら、5年後は学校現場で頑張っ

て決めたなら、5年後は学校現場で頑張っ

司会

高橋
長濱

して、結婚の時期についてはいかがでしょう。

いやー、35までには結婚できたらいいなと思いますけど、なかなか。

10年後は聾学校の教師になってたらいいなあと思っていますけど、一般企業で働いているかもしれません。結婚はしてたらいいな、と思っ

ます。また、趣味で陸上や野球を楽しんでいるはず。20年後は、教師として子どもとの時間を楽しく過ごしていると思います。もし、結婚してたら子どもがいたらいいですね。30年後は、

教師として若い先生に助言出来る立場になりたいです。また、聾者の世界でも、例えば、聾者・

難聴者の働ける場の拡大を訴える活動等して貢献したいです。趣味のスポーツは相変わらず続いていると思います。

安宅

将来のことは、教師になろうかどうしようか考え中ですが、なれたらいいなと思って。私の母は専業主婦ですが、それもいいんじゃないかなとも思

います。30になるまでには結婚したいんですけど、結婚して子供ができたら1回は仕事はやめてもいいかなと。経済的に余裕があればそれでもいいのかなと思っています。

藤本

5年後のことは、学部を卒業した後にすぐに教員採用試験を受けるか、院などに進学をするか考えていて、どっちになるかなと考えています。10年後は絶対先生になれていいなと思います。

40代は、私は聾学校の先生になりたいので、できれば聾学校の中で働いて、若い先生たちをまもられればいいなと思います。

藤井

10年後、20年後のこと。それが一番難しいんですけど、物をつくってみたいなと強い思いがあります。応用実習に行ったらすごくおもしろくて学校の先生もいいなと思って、採用試験を受けようとは思っているんですけども、どちらかというところをつくることをやってみたいです。



非常勤とかやりながらお金をためつつ、自分の製作工房を持つ、その準備段階がこの五年間だと思っています。今、全国を回って、いろんな金工の工房だったり、知り合いの人の個展とかに行きながら、工房就職のこともちょっと考えつつ動いています。

10年後は北村先輩と一緒に工房持てたらいいなと話をしている、それまでに流通ルートを確認しつつ、技術も上げつつ、軽井沢の奥地で、ただ

同然で家賃を払わずに貸してくれるという人がいたりするので、そういうところで製作していったらいいなと思って思っています。

20年後 40代、50代。ずっと同じです。変わらないですね。まようお茶をたてさせていたんだんですけど、お茶を習いながら、お茶道具にも使われている金工の魅力っていうのをすごく感じて、お茶道具をつくっていったらいいなと思っています。

北村 学芸大では木工をやっている、今は東京芸術大学の大学院の2年生で木工をやっています。

5年後は29歳。子供は二人くらいはと思うと、30前後には結婚したいかなと考えてます。工房も10年後ですね、そのくらいには工房を持てたらいいなと思っています。20年後となると40代ですね。夢の話になると、工房が落ち着いてきたらお店もやりたいなと思っています。夢ばかりなんですけど、50代、60代になってくると最終的には徳島に戻って、徳島に文化的な貢献ができればいいなと考えています。

この後、座談会は「結婚」をテーマに、「いつ頃したい?」「結婚式は?」「家事分担は?」「お財布は一緒?」など、話が広がりました。その模様は、聾者会ホームページの「学生座談会 結婚篇」に掲載しています。ぜひご覧ください。

「結婚篇」に掲載しています。ぜひご覧ください。
[聾者会ホームページ] www.u-gakugei.ac.jp/~douson

新人司書奮闘記

〔東京〕 東村山市立図書館 司書

渋谷 泰子（2006年 学習社会文化卒）

新人 司書

わたしは現在、都下東村山市立の図書館で新人司書として勤務しています。人口約15万人、東京とは思えないほど緑ゆたかな東村山で、日々さまざまな図書館業務に奮闘しています。

「本が好きだから司書になったの？」とよく聞かれますが、わたしが好きなのは本だけではありません。図書館資料はもちろんのこと、利用者と接すること、施設を運営すること、行政組織の一員として市民に奉仕すること。それらすべてを含めて「好きなこと」を仕事にしています。

「日本はアメリカの国債をいくら持っているのですか？」うちの妹が罹っている××という病気について調べたい」「駐輪場で自転車の鍵をなくした」「来月のおはなし会のスケジュールは？」などなど、カウンターではあらゆる角度から質問が飛んできます。利用者の疑問と図書

館資料をつなぐことがわたしたち図書館司書の仕事です。

もちろん楽しいことばかりではありませんが、それも含めて「辛せだ」と思える毎日です。

学生時代

わたしは平成14年4月に生涯学習課程学習社会文化専攻に入学し、平成18年3月に同専攻を卒業しました。親元を離れてのはじめての一人暮らしでしたがあまり不安は感じることなく、全国各地から集まった仲間たちと夢中で駆け抜けた4年間でした。

あらゆる教科を網羅している学芸大のカリキュラムの中から様々な授業を選択して受講した



美術科の学生との合同ゼミの風景（右奥が筆者）

サークルでの活動に主眼を置いた学生生活だったようにも思います。

修行時代

大学3年生の冬に東久留米市立図書館で3週間のインターンシップに参加させていただき、公共図書館で司書として働きたいという思いはますます強いものになりました。

ことが今のわたしの貴重な財産になっています。また、学校教育という既存の枠にとらわれることなく人間の学習活動全般について学ぶことができた「L学」という環境が自分に合っていたのではないかと、とも思います。ただ、お世辞にも優秀な学生とは言えず、所属していた管弦楽

こと、各種法人や大学の図書館でさえも正規職員の採用は極端に少なく、就職活動は困難を極めました。倍率が100倍以上になることも珍しくなく、採用試験を受験するために静岡県や岡山県まで出向いたこともあり、大卒後すぐに正規の司書職に



東村山市立図書館内の様子

就くことはできませんでした。

卒業後は近隣の西東京市の図書館で嘱託員として勤務しながら実務経験を積ませていただきました。一口に嘱託員とは言っても、自治体によって考え方や運用が大きく異なります。わたしが在籍していた西東京市図書館では、週5日出勤し、図書館資料の選定やおはなし会の企画運営、図書館間相互貸借業務などさまざまな実務に関わる

ことが許されていたため、かなり正規職員に近いものでありました。しかし「早く正規の図書館職員になってバリバリ働きたい」という想いは捨てきれず、毎日の業務でヘトヘトになりながらも公務員試験のための勉強や採用情報収集に必死になっていました。そんな折、都内の自治体である東村山市で正規司書職員の募集があることを知り、「ダメでもともと。力を試そう」と思いながら受験したところ、ご縁をいただき平成19年の10月から正式に採用される運びとなりました。

未来への課題

現代は、情報の取得にも格差がある時代です。「知らなかった」では済まされない身近な問題も多く発生しているし、テレビからの情報だけを頼りに生きてゆくのは困難な時代です。

そんな現代だからこそ、「まちの図書館」の存在意義があるのだと思います。インターネット

トを持つ人も持たない人も、子どももお年寄りも、誰でも等しく情報にアクセスできる場所が図書館なのです。Googleの検索窓にフリーワードを打ち込むように、利用者はわたしたち図書館職員に対して様々な質問を投げかけてきます。時間を無駄にすることなく的確に回答するためにも、資料の収集・整理・保存という図書館の機能を最大限に発揮しなければなりません。

「消えた年金記録」問題に関連して、かつて自分が在籍した会社の統廃合の歴史を調べたり、家族の病気の治療ガイドラインを調べたり、地域の子育て情報を調べたりと、市民生活に直結したサービスを提供する場でもあるのです。

市民と直接向き合い、ときにお叱りを受け、ときに感謝される。自分のスキルアップが市民へのサービス環境を向上させることに直結する仕事なのです。

図書館法の改正、設置母体である市区町村の財政、管理運営形態の多様化など公共図書館をめぐる諸制度が変革しつつある今。現場のわたしたちは「情報の架け橋」になるのと同時に「情報の発進地」の役割も担う必要があると考えます。

多摩地区の共同保存図書館づくり運動など、新たな時代を拓いてゆく図書館員として、ますます努力してゆきたいと思っています。



学芸大3年生が図書館見学で東村山市立図書館へ来館



写真中ほどの氷河の支流は、瘦せて地表が見え、本流に繋がらなくなったもの。

空へ

大学3年の秋、指導教官に教官室に呼び出された。俺何かしたかな・・・と思いつつ教官室にはいった。「やあ寺谷君、最近調子はどうですか?」「はい、特に何ってありません、普通ですが。」「そうですね、それは良いですね。ところで君これをやってみませんか?」先生は新聞の切り抜きを差し出した。それは日本航空の広告で、パイロット募集のものだった。「はあ・・・」と言いながら、広告をみていた。

あれは入学直後、指導教官と初めての面接の時でした。

自己紹介をした後、教官は「君はどうしてこの学校にきたの?」私は自分の思ってたまま「私は、大学生を送ってみたいと思ってきました。皆には悪いけど、教員になるのは選択肢の一つであって、この4年間の内に何かやりたい事が見つかればと思っ

ています。」

「ああそうなの、教員になる為だけではないんだ。うーん それではどんな事やりたいと思ってたの?」「以前は機械的な事とか、建築関係とか、飛行機が好きでパイロットなんか憧れていました。」「ああそう、まあこの4年間しっかり勉強し、楽しんで・・・」

と面接の時のことが頭に浮かんできました。あの時の事を覚えていて下さったんだ、ととてもびっくりしていると、「どうですか?」と言われて、「はい、やってみます。」とおもわず言ってしまった。

「応募の締め切り期日が迫っているの、必要書類をすぐに準備して行ってください。」

確か学校関係の必要書類は、翌日にはいただき、自分のものも含めて締め切り日の2日前くらいでした。

試験の要項が送られてきて、かなりビックリでした。試験は

1次から6次までで、約2ヶ月半に亘ってでした。えらい事を始めてしまったなと思ったが、とりあえず挑戦してみよう。刺激的な2ヶ月半も終わり、なにか自分の夢に向かって少しでも歩けたことが本当にうれしかった。最終採用電報が飛び込んできた時には、本当にほんとかないと、信じられないくらい嬉しかった。指導教官に報告すると、「寺谷君、良かったね、本当によかったね!」と喜んで下さった。あの入学時の言葉を覚えていて下さり、3年目にそれを薦めて下さった先生、僕の人生で大きな転機となりました。『会田先生』 本当に有難う御座いました、感謝しています。

CO₂

最近地球温暖化の話をよく耳にしますが、飛行機が排出する量を想像できますか?

ある日のパリ行きの消費燃

料は、ボーイング777で199700ポンドです、ドラム缶で599本も掛かります。もちろん機種によって燃費は違います、B747-400は1.25倍、B747在来型は1.7倍です。100ポンドの燃料で約143kgのCO₂を排出しますから、この燃費の良いB777で、約286トンのCO₂を排出します。車に置き換えると、1997台が一斉にガソリン60ℓ消費した時に排出するCO₂に相当します。そして、この1回のフライトで排出されたCO₂を吸収しようとなると、1997本の杉の木が10年もかかります。

このように大量のCO₂を排出する飛行機で仕事をしていると、アラスカ・ロッキー山脈などの氷河が後退してきているのや、表面が解けて堆積物が溜まり黒っぽくなっているのを見たり、グリーンアイランドの氷が少なくなつて、夏にはより多くの地表面が露出してきたり、シ

ベリア上空に温帯地方に出来るような積乱雲が出現しているのを見ると、この10年間で大きく変化しているのを肌で感じます。毎回のフライトでたとえ

100ポンド(ガソリン約60ℓ)でも節約できればと考えています。

地球を守ろう。たかが100ポンド、されど100ポンド。



追い越され際に撮影。機体の後ろに飛行機雲。

もえたぎる想いを自然体で

【埼玉】 全日本柔道連盟事務局

米重 清光 (1972 年 保健体育卒)

拝啓

あいだまさる
会田 勝 先生、

ご無沙汰しております。先生が鹿屋体育大学の副学長として赴任されたことをお聞きしたとき、当時、嬉しく感じたことを覚えております。

会田先生に褒めて(?) いただいたことは一度だけ。1968 (昭和43) 年4月、D類保健体育科に入学し柔道部に所属した私の入学試験成績のこと。一浪していたとき、柔道整復師養成の専門学校に昼間、通っていたので受験勉強は辛



2006年 柔道を代表して、日本武道館で「古式の形」の演技

かったのですが、試験当日はなぜかよくできた実感がありました。しかし就職のこと、恋愛のこと等々、会田先生のご指導やご期待をことごとく裏切っていましたから、先生には合わせる顔がありません。

川村禎三教授 (当時・柔道部部長) のご推薦により、現在の財団法人全日本柔道連盟に勤務してかれこれ35年。日々元気にやっていますので、体験したこと、感じたことなどの幾つかをご報告できたと存じます。

八反丸先生の君が代

2004アテネオリンピック日本柔道代表選手団壮行式 (講道館) のときの君が代は、医師で柔道六段の八反丸善文先生が独唱。アカベラ。壮行式後、講道館少年部の前の廊下で、子供たちが大きな声で「♪きーみーがーあーよーおーはー」

と歌っていた光景が今でも忘れられません。子供たちの胸にやわらかくしみこんだ君が代は、アテネの柔道会場で、8回も聞くことができました。後日、八反丸先生への御礼状の文面。「お陰さまで、先生の君が代から始まって、子供たちにもつながり、そして日本国民に勇氣と感動、そして夢を与えることができました。」

「ママでも金!」

2008北京オリンピックの柔道48kg級で、谷亮子選手の

金メダルと五輪3連覇は成りませんでした。谷亮子選手が今回のオリンピック代表選手に決定したとき、そして五輪後、全柔連事務局には一般の方々からのクレームが多数寄せられました。「国内での選考試合決勝で、2回も投げられているのに日本代表。そんな選考方法が許されるのか。若手選手の芽を摘むのか!」「2012ロンドンオリンピックをめざすという現役続行宣言は、晩節を汚すもの。全日本柔道連盟はそんなことも指導できないのか!」等々。クレー



1992年 パルセロナ五輪で初めて代表に選出された田村選手

ムの対応は真摯に聞き、時々相槌を打って説明を加えるのがコツ。珍しく今回は3名のクレマーから「初めて丁寧に聞いてもらえた」と言われました。

燃えたぎるような熱い想いを

1995世界柔道選手権大会（平成7年9月、千葉・幕張メッセ）のプレイベント、嘉納治五郎杯国際柔道大会。7月下旬に実施した「大会式典部会」では表彰式や特別演技についてあれやこれやと冷房の切れた会議室で午後7時から延々と11時頃まで熱っぽい論議が交わされています。そのとき担当役員のM氏が「髪振り乱しての燃えたぎるような、ひたむきさが、この準備会議から感じられない」のひとこと。これがきっかけで、世界選手権本番まで小さな衝突はありましたが、「よくやった！」という評価を最後にもらうことができました。少し背中を押してみることで、結束が図れたのかもしれない。

1995世界柔道選手権大会でのアドバイザー、コシノジュンコさんや長田渚左（おさだ・なぎさ）さん。「日本柔道界の言うメダルとは金メダルのこと。優勝した日本選手が先ず抱く感慨は、嬉しいというより、肩の荷をおろせた、安堵感です。我々事務局のスタッフも同じ想いで、何事にも対処しています」と日本柔道界の一端を説明したことがありました。



1994年頃 国際交流も勉強になります

「お陰さまで」国体柔道競技

私は、毎年行われる国体柔道競技の運営を長く担当していただいたので、交際範囲が広がり、力をつけることができました。

1993（平成5）年10月、香川県白鳥町在住で同期の安藤正倫（1）。眞澄（2）夫妻のお宅に突然お邪魔し、夕食をいただいたことがあります。同級生の浅野哲男さん（3）と貝瀬輝夫先生（4）とともに、「東四国国体柔道競技会」（香川県）の運営担当役員として活動したときの時間外のひとこま。そのとき誰かの酔狂で、当時の私のマドンナ、小西（旧姓・土屋）真理子さん（弘前市在住）に電話をつながれて、私はずいぶんとあわてた想い出がありました。

会田勝先生、とりとめのない雑駁な手紙になってしまいました。前述したおふたりの他に、柔道

部の佐藤幸夫先輩（5）にも今もいろいろとお世話になるばかりです。勤務が事務局という性質から、私の業務は「準備をして、成功に向け環境（人や物）を整えること」。挨拶や丁寧な対応とそれに笑顔だけは忘れず、これまでやってきました。

東京学芸大学で学んだことの誇りを胸に、これからも肩の力を抜いて自然体で何事にも努力を傾けていきたいと思えます。

最後に、先生のご健勝をお祈り申し上げまして、ご報告を終わります。

敬具

注

（1）さぬき市立造田小学校校長。当時は白鳥町立白鳥中学校教頭。

（2）旧姓近藤、当時は教頭。4年前に逝去。合掌。

（3）東京練馬区立大泉北中学校校長、全日本柔道連盟理事。

（4）講道館道場指導室長。当時は学芸大学教授・柔道部監督。

（5）東京都教職員研修センター教授

北海道への就職と暮らし

【北海道】 北海道教育大学 札幌校 准教授

千賀 愛 (2003年 発達支援講座博士卒)

障害

児教育との出会い

初めて東京学芸大学のキャンパスを訪れたのは、1994年1月、センター試験の時でした。後期試験をどこにするか決めかねていたところ、セン

ター試験に失敗した当時の友人が学芸大学の入学案内一式を私にくれたのがきっかけで知りました。心理学と教育学、基礎的な医学に関心があったので、すべてがバランスよく学べる障害児教育学科を見つけ、これは面白かもしれないと受験を決めました。

教員志望でもなく、障害児教育そのものに関心が高かったわけではなかったので入学直後に戸惑いはありましたが、アットホームな学科の友人、熱心な先生達に恵まれて、大学生活が始まりました。



平成19年度 学校教育研究室 卒業論文発表会 2008年2月16日

北海道教育大学岩見沢校にて。最前列左から4人目が筆者。

学部時代の自主ゼミで学ぶ
高校時代はあまり勉強していなかったせいか、大学で学ぶことはすべて新鮮でした。当時の障害児教育学科では、いろいろ

な研究室で「自主ゼミ」が開かれていました。大脳生理学、ドイツの障害児教育史、解剖学・運動生理学など、各分野の英語やドイツ語の文献を、学部生から大学院生まで集って一緒に

に訳しながら読み進めていきます。

私は1、2年生の頃、大脳生理学の研究室(堅田明義先生)、ドイツの障害児教育史(松矢勝宏先生)の自主ゼミにそれぞれ週に1度参加していました。最初は専門用語ばかりで数行を理解するのに何時間もかかりましたが、単語帳を作りながら徐々に覚えていきました。この自主ゼミは卒論・大学院生が中心でしたが、先生も途中から参

加して、ゼミ後のおしゃべりや夕食も大きな楽しみでした。こうした自主ゼミから、多くの研究者が巣立っていきました。

学部時代に多くの時間を費やしたもう一つの話は、アルバイトです。脳性まひの女の子のシッター兼家庭教師は学部時代から10年近く続けましたが、その他にも編集プロダクションのアシスタント、レストランや喫茶店でのウェイトレス、スーパーでの促進販売など、いつも2つは掛け持ちしていました。また大学院進学後も財団法人や建築事務所の事務仕事をしました。アルバイトでの様々な職業体験にも大きな意味がありましたが、学部2年の時はスウェーデンへの視察旅行、それ以降は論文の史・資料収集のためアメリカのシカゴ大学とコロンビア大学への年数回の訪問が主な目的でした。

大学院時代の生活

スウェーデンへの視察旅行



1-2年に一度は訪問するシカゴ大学のキャンパス(奥はデューイ実験学校)

は、障害児教育学学科の高橋智先生と日本福祉大学の先生が企画していた北欧の障害児教育・障害者福祉の施設訪問を目的とする十日間にも及ぶものでした。この旅行をきっかけに学部3年生の後半から所属した研究室が、高橋智先生の障害児教育学・特別ニーズ教育学でした。毎週水曜日の午後、研究室のメンバーが一同に会して各人の研究テーマについて報告する「論文検討会」が行われます。この毎週の検討会は全員発表が原則で、「継続は力なり」とコソコソと論文や史料を読み、自身の

テーマについて考察を加えたレジュメをもとに、先生の指導を受けます。検討会は学部生が帰った後、大学院の部に入る頃にちようど夕食の時間になります。研究室には炊飯器、なべ底の深いホットプレート、電子レンジ、冷蔵庫があり、おでんや鍋、シチューやカレーなどをみんなで作って食べていました。大学院生時代も同様に毎週の論文検討会が行われ、「研究生活」のリズムが形成されました。

北海道への就職と暮らし

2004年の夏、北海道教育大学への就職が決まり、同年10月に北海道へ引っ越しました。私の両親が北海道出身だったこともあって、北国での生活はすぐに慣れました。大学では山菜取りの名人の先生が季節の収穫物を分けてくれたり、近くの温泉に出かけたり、研究交流をしたり、年齢差はありましたが分野を越えた「同僚」の交流はうれしい誤算でした。北海道では

温泉は銭湯代わりのようです。北海道教育大学では、特別支援教育専攻のコースで主に特別ニーズ教育学・障害児教育史の講義や卒業論文・修士論文の指導、教員研修を担当しています。過疎地や長い冬の厳しい環境、財源不足に伴う教育条件の地域

格差や学力問題、とりわけ障害児・者の教育・福祉は課題が山積しています。できることは限られていますが、障害児教育に関わる学生・院生を育てながら、北海道の学校の先生との実践・授業研究、そして自身の研究を続けていきたいと思っています。



北海道富良野の風景

二十数年ぶりに母校を訪ねて

〔高知〕中土佐町立久礼中学校教頭

戸梶 忠行（旧姓黒瀬／1985年数学卒）



旧鷹野荘の前で撮ったツーショット写真

今春、

20数年ぶりに母校を訪ねることが

できました。長女が志望していた学芸大への合格を果たし、新生活の準備のため家族で上京した際に、母校を訪ねてみることにしたのです。

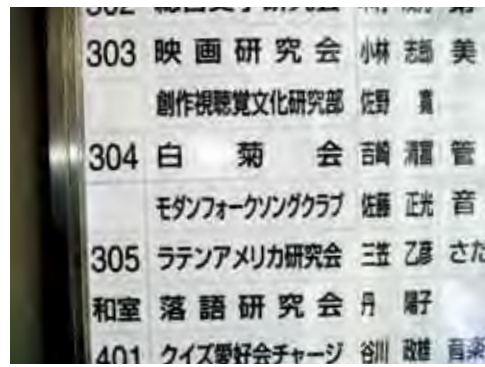
久しぶりに訪れる母校は、感慨深いものがありました。子どもたちに学内各所の案内をしていると、学生時代の思い出が蘇ってきます。東門からまっすぐに伸びる道は、昔と変わっていません。ちょうど桜が満開で、私たち親子を温かく出迎えてくれるようでした。毎日利用していた生協食堂は、在学時と全く変わっていない様子でした。第二生協、図書館、芸術館、体育館、自然棟など、思い出がたくさん詰まっている建物が、今も変わらずにありました。新しい斬新な建物に変わっていた講義棟では、時の流れを感じさせられました。

在学時に多くの時間を過ごしたサークル長屋を探しに、第二

生協裏のテニスコート脇を見に行きました。そこにはもう何もありませんでしたが、近くに新しいサークル棟ができていました。入り口に掲示されていた入居サークル名一覧に、私が所属していたモダンフォークソングクラブの名前を見つけたときは、密かに歓声を上げました。

モダンフォークソングクラブでは、生協前広場でミニコンサートをよくやりました。食堂にやってくる学生を横目に、ギターを弾きながら歌ったことを思い出します。噴水前広場では、同じ音楽系サークルの軽音楽部・音楽友の会と合同でサマーコンサートを毎年行いました。コンサート前に噴水を掃除し、終了後に噴水に飛び込んだことも、今では良い思い出です。

妻と出会ったのも、学芸大です。同じD類数学の同学年で、ゼミも同じで二人とも政池寛三先生のゼミに所属していました。サークル活動では茶道部に所属し、大学4年の小金井祭の



現在のサークル棟の看板

時に茶室の前で撮ったツーショット写真は、今も部屋に飾られています。今回の訪問で、思い出のその場所を探してみました。残念ながら見つかりませんでした。

卒業後、妻の実家がある高知県に二人とも就職し、そして結婚し、夫婦で教員を続けました。私は中学校、妻は高等学校、と校種は違いますが、同じ数学科教員として時に数学教育談義をしながら時を重ねてきました。4人の子どもに恵まれ子育てに翻弄される日々が続きましたが、気がつけば、私たちの子どもと同じ道を目指していました。教師を目指すなら教育学部へ進学を、できれば学芸大へというのが私たち夫婦の願いでした。私たちの思いが通じたのか、前述のように今年から学芸大で学ばせていただいています。将来、小学校の教員にな

ることを目指し、さまざまな活動に積極的に取り組んでいるようです。私たちと同じ数学選修です。親子で数学教育談義をすることも近い将来あるかもしれない。

今春、母校を訪ねたことは、さまざまなことを改めて考える機会ともなりました。教員となつて今年で24年目となりますが、教員としての原点は学芸大での4年間にあると思つています。全国各地から集まつてきた友との語らいは人間としての大きな成長につながつたと思えますし、サークル活動など今に通じるさまざまな貴重な体験ができたと思つています。そして何よりも、教育に懸ける熱い情熱を教えていただいた学芸大の精神は、教員としての私を根底で支えてくれています。今、教育界は大きな変革の時期にきています。難しい状況の中にありますが、学芸大で学ばせていただいた誇りに胸に、今後訪れるであろうさまざまな困難にも立ち

向かつていきたいと思えます。

母校訪問で、ただ一つ残念だったことがあります。それは、妻と一緒に訪ねることができなかったことです。妻は昨年10月に、44歳の若さで他界しました。約1年に亘る闘病生活で、一時は教壇に復帰するまで回復したのですが、再び病床につき帰らぬ人となりました。最後まで教壇への想いが強く、学校のことを気に懸けていました。教師としてやりたいことが、まだまだあったようです。学芸大を目指していた長女のこと、気になつていました。合格した暁には、夫婦揃って学芸大を訪ねようと誓い合っていました。願いは叶いませんでしたが、今回の母校訪問は、妻との思い出を振り返る機会ともなりました。共に過ごした4年間で心の中にいる妻に語り



現在の学芸大学東門の様子

かけながら、学内の思い出の場所を巡つたことでした。

今、学芸大で学ばせていただいている長女には、この4年間で学芸大の精神をしっかりと学び、人間として大きな成長を遂げることを期待しています。そして、妻の教壇への想いをぜひ受け継ぎ、教員への夢を実現させてほしいと念じています。



至仏山登山道の風景（中央のすじが登山道）

私は、大学時代の恩師である故小林弘先生の「おまえの実家は農家なのだから、群馬に帰って高校の先生になるのが一番いい」との言葉を受け、郷里の群馬で田舎教師（小説『田舎教師』の作者である田山花袋も同郷です）となりました。この言葉は、能力が乏しいにもかかわらず研究者へ

先生方の行う自然環境調査に同行させてもらい、群馬県の自然の様子を知る機会を得られたことは、とても恵まれたことでした。その後、本職の傍らで尾瀬保護専門委員として尾瀬の自然をつぶさに観察し、見守る仕事に携わるようになりました。尾瀬は、皆さんもご存じのとおり「有名」な場所であるため、

のちよつとした憧れを抱いていた私のいい加減な気持ちや能力の限界を見抜いた先生なりの愛情表現であつたと思つています。

最初に赴任した実業高校では、生徒指導や生徒会活動・部活動に明け暮れ、大学時代に学んだ「理科教育」や「生物教育」などという世界とは全く無縁の日常を送つていました。しかし、自分の学問的な「核」となるものへの渴望はやみません。そんなとき、地元の

研究分野においては行政や大学主体に何度もの合同調査が実施されてきました。しかし、その多くは大学院生の博士・修士論文の題材で終わるような一過性のもので、残念なことに、その後の発展・継続的な調査には至つていないのです。幸い私は地元にいるため、尾瀬の自然に関するいくつかの疑問を継続的に調査することができましたので、その結果の一部を紹介したいと思います。

なつた時代が長く続きました。私たちは、その抜き取り作業に初めて「待った」をかけたのです（とは言つても抜き取りがすべて悪いというわけではありません）。特に「オオバコ」は、抜き取つても抜き取つても、またその場所を覆つてしまひます。なぜだと思ひますか？それは、その場所がすでにオオバコしか生育できない土壌環境になつてしまつたからなのです。

話題1 尾瀬への移入植物問題

尾瀬ヶ原の価値は、広大な高層湿原（^①）と、固有種（^②）の多さにあります。ところが、人里の雑草（オオバコ、スズメノカタビラ等）が、尾瀬ヶ原の山の鼻地区に目立ってきた頃から、大学の先生をはじめ自然保護関係者が「抜き取り」に躍起に



至仏山登山道最大裸地にて親子で作業 2003.10.19



裸地調査地点の植生変化 2000年



裸地調査地点の植生変化 2001年



裸地調査地点の植生変化 2002年



裸地調査地点の植生変化 2003年
(オオバコが徐々に裸地を被う)

尾瀬ヶ原の山の鼻地区の山小屋周辺は、年間何万人という入山者の踏みつけにあいます。その結果、地面が固まり、水分がなくなつて乾燥してしまうのです。そこはオオバコの生育適地となります。このオオバコを抜いても、その跡に尾瀬本来の植物は育たず、またオオバコが生育するこの場所は「尾瀬であつて尾瀬でない」場所なのです。このオオバコを踏みつけられないようにして、そのまま放っておくとどうなると思いますか？植物の遷移を学んだ皆さんならもうわかりでしょう。そうです、別の植物が生えてくるようになります。つまり、尾瀬本来

の植物が徐々に生育してくるのです。しかし、硬い土壌には限界があり、残念ながら湿原の植物までは復元できません。自然とは、そういうものです。注(1) 実際は中間湿原や低層湿原も多い。(2) その地域にしか生育していない種類。

話題2 至仏山東面登山道裸地の植生復元作業

私は登山者の踏みつけによる登山道の植生破壊(裸地化)の現状調査と植生復元の手法や、復元に適した植物種についても長年調査をしてきました。その結果、踏みつけによる植生破壊地に先駆的に生育(代償植生)している「ヤチカワズゲ」に着目し、その種子を集め、植生破壊地点に播種し、また苗を育て移植してきました。しかし、一度破壊された自然を元に戻すのは容易なことではありませんでした。あるとき、東京の大学の有名な先生方がその復元箇所を視察し「なぜ原植生の復元を目指さなかったのか」と厳しく叱責されたことがあります。確かにそのとおりかもしれませんが、その環境にもともと存在していた植生(原植生)を復元することなく、代償植生種(植生破壊後の変化した環境に生育する植物種…ヤチカワズゲ)を播種していたのですから。しかし、私は反論しました。「この植生破壊地では原植生(ここ

の植生は雪田植生)は、復元できません。原植生を支える泥炭層が登山者の踏みつけと雨水によって流出してしまつています。代償植生である蛇紋岩礫地植生しか生育できない環境です」。しかし、その先生は理想としての植生である原植生を復元しようとしなかった行為やその考え方をその後も強く非難されました。

数年前にヒットした映画の中の「事件は現場で起きている。会議室にいてはわからない」という意味のせりふを、ふと思ひ出しました。地方にしなければできないこと、現場にいないければ気づけないこともあります。自然保護にはそういった一面が必ずあります。

とはいえ、学問においても自然保護においても私は、中央と地方、大学と現場というような二項対立をことさら強調したいのではありません。むしろ役割分担とお互いの信頼が必要であると強く感じています。

二つの庭の物語

「吉田水辺公園」と「飯島和日本院園」

学長 鷺山 恭彦

東門を入ったケヤキ並木は、本学の誇る景観の一つだが、右に曲がると、これまた立派なイチヨウ並木になる。並木の途切れた右手の空間は、以前は草地だった。

今はそこに、水車が回り、溪流をもした小川が流れ、その下には池が3つでき、雑木林の周辺には起伏のある土盛りがされ、休日ともなると、子供たちが大勢遊びに来る。草地で遊んだり、手製のはしごで木に登ったり、木の上に拠点を作ったり、ロープで池を越えたりして楽しそうだ。「どこから来たの」と聞いたら「八王子」と答えたのには驚いた。

残土の捨て場にされていた草地が、このように変身したのは、吉田裕美先生のおかげである。

吉田先生は竹早学園の理事長を務められた。創立が明治21年という由緒ある竹早教員保育士養成所は本学と深い関係にあり、私は入学式には必ず出かけて祝辞を述べた。「あの指摘はよかった」「こう言えばよいのに」と吉田先生は必ずコメントをしてくださり、大変親しくさせていただいていた。

先生は、本学の草創期、1950（昭和25）年に入學された第二回生で、地理学を修められ、京都大学やハイデルベルグ大学でも学ばれている。「初代の木下学長に大変かわいがってもらった」と盛んにいわれるので、「先生は私より一回り上ですから、まさか私が先生をかわいがるわけにはいきません。かわいがってくださいるなら判りますが」と申し上げたところ、「おおいよいよ」といわれた。

飯能市議会議員を33年も務められて地域のために献身されたが、母校のために何かしなくてはと常に考えて、同窓会の仕事もよくされていた。ある時、「水車を寄付しよう」といわれた。いきなりの申し出に戸惑い、「万葉池かなあ」と思ったが、どうも収まりが悪い。それでこの疎林の草地を思いついたのである。

先生は自らやらないと気のすまない方で、場所が決まるとイメージを膨らめ、小川と池のために秩父石を運んでくださり、自ら配置の指揮を取られ、さらにサツキ、モミジ、百日紅も植樹された。私たちもワイワイ意見をいって、飯能の蔦屋さんや山水

さんとの作業は大変楽しいものだった。

おかげで水車と小川と池の風情あふれる庭ができた。大学では「吉田水辺公園」と命名し、感謝状を差し上げた。吉田先生は、単に水車ではなく、水車小屋にして米などを撞く機能を備えた本格的な形にしたいと考えておられたようだが、今年1月に急逝されてしまった。衝撃と痛恨の思いはいまだに消えない。

弓道場の建て替えにも秩父の西川材を安く提供できたら、と提案してくださって、効率化係数と総人件費抑制政策に苦しむ大学にとつて大きな励みだった。大学で伐採したヒノキやイチヨウを飯能に運んで、製材もしてくださった。大学ではそれを元に生協広場の南の木陰にテーブルとベンチを作って置くことができたし、残りの材は小中学校や大学の教材にまわった。イチヨウの木は、まな板にして、好評である。

吉田先生がお元気なら、世界の開け方がまた違ったのに、と思うと残念でならない。せめて「吉田水辺公園」をさらに豊かに展開して、先生のお気持ちに応えたいと思う。

水辺公園が野性味たっぷりなのに対して、正門を入った左手に、端正な日本庭園ができた。飯島さんのご寄付によるものである。

1969（昭和44）年に大学創立20周年を記念して会館を造ろうとした時に、山崎パン社長の飯島藤十郎さんが多額のご援助を下された、という言い伝えがあった。その歴史を掘り起こしてパンフレットにし、飯島さんを記念して飯島同窓会館と命名したところ、思いがけず奥様から多額の寄付を頂いたのである。

会館が改修整備され、日本庭園が造られた勢いで、弓道場の整備も具体化しはじめた。芸術館に向かう空間が大きく変わろうとしている。こうした新しい始まりのきっかけをも与えてくださった貴重なご寄付である。

飯島藤十郎さんは三鷹村のご出身で、豊島師範時代には陸上の選手として鳴らし、豊島師範陸上競技部の黄金時代を築いた方である。

和さんは、三重県の伊賀上野から12キロほど入った花垣村大滝のご出身で尾森和さ



んといわれ、上京して本学の前身の女子師範に学ばれた。1936（昭和11）年に卒業されて小学校の先生をされ、飯島藤十郎さんと結婚され、ご夫妻で先生をしてもらったが、応召と戦争の激化で共に教職を去られた。

終戦時、藤十郎さんは駐屯地の市川の練兵場が開拓されることになって、それに参画。わらを小麦に換えたことがきっかけで、それを元に1948（昭和23）年に「山崎製パン所」を始めたのが今日の山崎パン株式会社で、創業の苦勞を共にされた。

経過報告にお宅に何度か伺った。1914（大正3）年のお生まれで90歳を超えておられるのに矍鑠としておられ、いろいろな思い出話を伺った。『武蔵野の野辺に立ちて』という歌集も頂いた。苦難の人生とお人柄が映し出された心温まる本である。何首か引用しよう。

故郷を偲んだ歌・・・「伊賀の里遥かに入りし大滝は平家落人のかくれがの里」「朝の道に桑の実踏み思ひ出しぬ幼き頃の母の姿を」。

仕事に邁進した日々の歌・・・「来客の声に態度に学びたり共に喜び榮ゆる道を」「心より客を迎えるサービスに喜び帰る客を見送る」「厳しくも最後の会議修了了帰路まゐるき陽の沈みつつ」「寒風に睡魔を払いひたすらに走りつづける夫の姿に」

今までを振り返った歌・・・「店に立ち親切迅速モットーに励みし過去に悔いは残

1

らず、「今ここに集いし人の顔見れば若き日の面影のよみがえる」「五十年の時と流れを内に秘め今日の集いの顔懐かしき」

そして学生時代の同級生との語らいの時の歌・・・「秋深みセーラーの友集い来て昔を語る顔懐かしき」「竹早の園を巣立ちて六十年集う顔ばせ輝きており」

7月23日には「飯島和さんに感謝する会」が催された。庭を「飯島和日本庭園」と命名し、全国同窓会「辟雍会」の名誉会長になっていただいた。会館の二階は辟雍会の事務所になり、卒業生の気軽に立ち寄れる場になっている。

野の雰囲気をつぶりとたえた「吉田水辺公園」には子供たちが集う。安全を配慮して地域の皆さんが水辺公園を支える実行委員会を作ってくださいという。

「飯島和日本庭園」は、武蔵小金井の園芸家・三上常夫さんと森次郎さんが設計施工してくださった。建物とマッチしたゆつたりとした安らぎの空間に、学内はもとより、地域の皆さんが朝な夕なに散歩にこられる。大学に新しい顔が二つできた。うれしい限りである。



2

各部報告

本部

●二期4年の荒尾体制の後を受けて平成20年4月から長谷川体制がスタートしました。平成19年5月理事会での会長候補者推薦委員会委員の選出、9月の推薦委員会による推薦活動を経て、11月3日の全国代表者会議で長谷川貞夫氏の会長が承認されました。また荒尾氏には顧問として引き続きご支援頂くことになりました。

●荒尾体制にて築かれた基礎をベースにより充実した活動を行うため下記のような組織の見直しと強化及び活動内容の拡充を行っています。

1) 組織改組:

①副会長は3名から4名体制となりました。加藤正克(社:東京学芸大学同窓会副理事)、柴田義晴(東京学芸大学健康スポーツ科学講座)、丹伊田敏(多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校校長)山本一雄(清水建設株式会社)

②会計部の新設、組織部の3分割を行いました。

総務部、会計部、広報部、事業部、組織部(組織第一部:学生会員獲得、組織第二部:教員(卒業生)・教職員会員獲得、組織第三部:企業(卒業生)会員獲得)

2) 活動状況:

規約の見直し、法人格の取得(中間法人)、事業の拡張(例:教育支援員取得講習と資格認定)等を予定しています。平成20年5月24日:第6回理事会を開催

①20年度・21年度の役員の選出:理事会の構成につき説明し承認を頂きました。

②19年度収支決算書&監査結果につき説明し承認を頂きました。

③20年度事業計画案を各部長が説明し承認を頂きました。

④20年度の全国代表者会議およびホームカミングデーは11月1日(土)と報告しました。

毎月第四木曜日に運営委員会を開催し活動状況の確認を行っています。

●会も5年目となりました。さらに発展させるため皆様方のご協力の程よろしくお願い致します。(幹事長:金子義和)

事業部

●11月1日のホームカミングデーのイベント

邦楽コンサートとピアノのコンサートと講演。邦楽コンサートは本学邦楽サークル「白菊会」、ピアノコンサートは本学卒業生の演奏家前田勝則氏、講演は昭和女子大学前学長の平井聖氏をお招きします。

●学生キャリア支援

「WORK語り合い」は在学生在が自分を見つめ未来を考える機会として企画しています。NPO法人キャリアカウンセリング研究会のメンバーを招いて実施。Imagaku(先輩と語り合う会)は先輩である東京都の現職学校長、副校長、教諭、養護教諭、退職学校長に来ていた

だき、具体的な現場の問題や学生が持つ不安について話し合う貴重な機会です。これ以外に企業向けキャリア支援セミナーや教員採用一時試験対策セミナーの後援を実施する予定です。

●本学卒業生の磯崎弁護士による法律相談会と勉強会

本年度も引き続き継続しています。会員のさまざまな法律上の悩みや生き方の相談等について無料で相談を受け付けています。また磯崎氏の指導を受けて在学生による法律勉強会を実施しています。

上記以外に、本年度は本学附属図書館収蔵の絵双六の中から2点を複製します。また新たに学校教育支援育成を始めることとし、今年度はその準備を行っています。(事業部長:黒石)

広報部

●年々発行部数が増加する「辟雍」の経費節減のため、本年度よりページ数を半減し、その分、ホームページを充実させることにしました。これに伴い、ホームページをリニューアルし、読者には最新情報が見やすいシンプルなデザインに、制作者には機動性の高いページスタイルに変更しました。会員が頻繁に閲覧する「見るのが楽しい、見たくなる」ホームページ作りを目指しています。コンテンツでは、辟雍会行事の事前広報、開催後はその報告にも従来以上に力を注ぎ、会員に行事への参加を促すと共に、会の事業内容が多くの人に理解されることを狙います。また、学生記者制度を導入し、在校生と卒業生を繋ぐ独自のシリーズ企画「ヘキヨウネットWeb」を実施中です。7月に開催された大学説明会では、高校生用に辟雍会パンフを作成しました。また、同月、学生懇談会を実施し、学生の“今”の声を大学内外に発信しました。なお、「辟雍」の全てのバックナンバーがPDFで見られるようになりました。(広報部長:真山)

組織部

●組織部の仕事は、一人でも多くの方に入会いただくことです。学生会員については、平成19年度卒業生以降、本年度入学までのほとんどの皆さんに入会していただいています。また、大学教員の皆さん、事務職員の皆さんにも、徐々に入会いただいています。加えて、附属学校園の教職員各位に入会いただくのも、これからの課題です。

さらに大きく困難な課題は、まもなく60周年を迎えようとする東京学芸大学歴代の卒業生、教職員の皆さんへの働きかけです。まず、どのようにしてこの方々への連絡するか、住所情報を集める方法はあるだろうか等々、頭を痛めています。このため、本年度から長谷川会長の構想によって、組織部を三部に拡大し、第二部は全国に展開する教員への働きかけ、第三部は企業等で活躍する皆さんへの勧誘を中心に進めることとし、それぞれ高橋智さんと山本晴信さんがそれぞれチーフを務めておられます。よろしくお願い致します。(組織部長:井口)

編集後記

■編集をしていくと思うのは、広報部の仕事は皆さんの協力があつて初めて成り立つものということ。でも、裏を返せば辟雍会自体がそういう性質のものということなのです。広報部はその一塊の濃いエッセンス。協力の度合いが高いものほど、出来もよくなるというのが、この数年間で知り得たことでしょうか。協力が強力になり、共同が協働になつてこそ辟雍会が豊かに発展するのですね。今年も、皆さまに感謝、感謝、感謝。(真山茂樹)

■今年の学生座談会では学生の未来や結婚について語ってもらいました。学生諸君の未来や結婚観は理想的か現実的なのか非常に興味あるテーマでしたが、実際には彼らにとつて非常に難しい問題だったかもしれません。また、未来や結婚について想像することは彼らが今、措かれた現状を未来・結婚という尺度で計るようなことで、学生諸君の現実の姿というものが良くも悪くも伺えたようでもありました。彼らの未来は未知数で夢や不安で一杯です。辟雍会が彼らの未来・将来への架け橋となり、共に伸展していく会へとなるよう努めていきたいと考えています。(古瀬政弘)

■今回の「辟雍」では学生座談会を担当しました。参加者の未来像と結婚論について紙面に載せきれないほど沢山語っていただきましたので、続きはホームページに掲載する、ということにしました。参加していただいた皆様が、地域貢献の教育、起業、芸術、政治家など自己実現への道を切り拓くことができますように、かつ、堅実な結婚観を持ち続けて幸せな家庭を築かれますよう祈っています。(鳴海多恵子)